

【優秀賞】

団体名	山田町と岩手県立山田高等学校との包括連携協定締結の下における震災伝承とふるさと探究
活動の内容（概要）	キャリア形成には、将来に目を向けるだけでなく、歴史を振り返ること、現状の課題を考察することが重要と認識し、石碑から災害の教訓を学び、未来へ語り継ぐ役割を果たすため「碑の記憶」を実践している。震災で壊滅的被害を受けた町が復興に向け歩みを進めているなか、本校は、その過程の課題を発見して解決に向け探究を続けている。さらに町と包括連携協定を締結し、学校と立地自治体が互いの教育リソースを探究に活用している。

受賞理由

- 過去の災害の伝承という地域にとって重みがあるテーマを、キャリア教育の文脈の中で実施しているという、価値のある取り組みである。高校生議会なども実践的であり、地域の発展と併せて危機管理も学生の重要な学びとなっている。
- 東日本大震災の伝承など、災害との向き合い方が重要な地域課題となる中、将来のみに目を向けるキャリア教育ではなく、過去の教訓から未来を見通す学びを「ふるさと探究」を中心に展開している。「ふるさと探究」で学んだ生徒が、高校生議会で一般質問を体験することは、地域理解を深めると共に、当事者意識を高めることにも役立つと思われる。小中も含めた学校教育全体と町との連携の強化によって、地元に戻って貢献するというサイクルが生まれ、地域の力となっているすばらしい取組である。メディアやICTの積極的な活用によって質の高い情報が広く発信されることを期待する。
- 東日本大震災後、高校生ならではの「災害を繰り返さない」という課題意識から学びを具体的に展開している。町内にある碑はともすると忘れられがちな津波の歴史を確かに伝えるものであり、次世代の担い手が発信する価値は大きい。新聞社ならではの貴重なアーカイブとつながり、広く発信するためにIT企業の協力を得たことは、これからの社会に欠かせない情報リテラシーの実践的な学びとなっている。これらのプロセスで多くの人・組織と出会い、コンピテンシーベースでも確かな変容が期待される。
- 生徒たちの一生懸命さが伝わってきた。高齢者から話を聞いた先人の教訓を次の時代に引き継ぐ縦軸、そんな彼らを見守る関係機関との協働を横軸にとっての活動がよく調和している。「ふるさと探究」活動で得た知識・情報を高校生議会での一般質問につないだところは見事。高校生もよく学び問題意識をもって活動した経験は、彼らのキャリア形成に必ず役立つと思う。個人的には今後の活動で「これより低地に家を建てるな」と刻まれた石碑をつないで浸水域を明確にしたパノラマ・ジオラマの制作は防災への啓発につながるのではないかと感じた。
- 東日本大震災大津波で壊滅的な被害を受けた山田町と岩手県立山田高等学校との連携による「総合的な探究の時間」を活用した震災伝承とふるさと探究の取組である。

連携・協働している機関や団体、組織

【教育関係者（学校、教育委員会等の機関や団体）】

岩手県立山田高等学校、山田町教育委員会（学校教育課、生涯学習課）

【行政や地域・社会、産業界等】

山田町、山田町議会、岩手日報社、IBC 岩手放送、Google Japan、NTT ドコモ

活動開始の経緯

【活動開始時期】平成30年～ 【継続年数】4年

平成30年に、本校独自の学校設定科目である「ふるさと探究」を立ち上げ、学びのフィールドを地域に広げた。さらに、平成31（令和元）年には、岩手日報社、Google Japanなどと協働して、「総合的な探究の時間」で石碑をテーマに過去の災害の歴史を調査して語り継ぐ「碑の記憶」を開始し、次年度には「復活の記憶」として発展させた。令和3年には、山田町との包括連携協定を締結し、探究活動のみならず、キャリア教育全体でも町との学びを深化させている。

「協力性」についての具体的な取組、工夫している点など

岩手県山田町は、三陸海岸のほぼ中央に位置する人口約1万5千人の小さな町である。東日本大震災大津波では、壊滅的被害を受けた。その町唯一の高等学校が、岩手県立山田高等学校である。生徒の大多数はこの地で生まれ育っており、地域を客観的・俯瞰的な視点で考える機会が少ない。一方、卒業後は、進学や就職で町外に巣立つ。いかにして、多様な文化や地域性を取り入れ、生徒が自らの将来を切り拓くキャリアを形成するのか。この課題設定のもと、地域と協働し、社会に開かれた教育課程の実現を目指した。

まず、学校設定科目「ふるさと探究」を立ち上げ、地域社会の課題発見と解決に向けた探究を開始した。校内で完結しがちであった学びの場を、地域のフィールドに求めた。さらに、地域連携を一層深化させるため、本校と山田町との包括連携協定が締結された。学びのリソースを双方向に提供し合い、探究の集大成である高校生議会では、生徒が実際の議場で政策提言を行った。高校生が将来的にも地域社会にコミットメントすべく、町の復興と発展に地域と協働して探究している。

さらに、「碑の記憶」「復活の記憶」として、町内の石碑から災害の記憶を後世に伝える実践も行っている。岩手日報社から、過去の記事の提供や調査全般の支援を頂いた。さらに、Google Japanによる実践的な指導を受けた。各関係機関の協力により、過去に幾度となく襲った大津波を伝承し、ICTを活用して地域や社会に広げている。



<語り部とともに石碑の教訓を読み解く生徒>

「継続性」についての具体的な取組、工夫している点など

本校の実践の目指す方向性は2つある。第一に、過去の災害の伝承である。「碑の記憶」では、多数の関係機関の協力を得た。岩手日報社からは幾度にわたって過去の記事の活用法や、取材方法のレクチャーを受けた。さらに、Google Japanからは、「マイマップ」の利用により、探究の知見をホームページに公開することで、地域のみならず全国に発信できることを学んだ。この取組は、現在も年次進行で新たな知見を更新し続けている。

第二に、生徒が地域社会にコミットメントすることである。高校生議会において、生徒の質問・提言については、全て町から答弁を得たほか、町の広報誌にも掲載された。人口減少が進行する町にお

いて、人々の暮らしと生業を持続可能なものとするため、高校生が地域行政にコミットメントするこの活動は、現在も継続中である。

今後は、「提案から実践へ」を理念に、高校生あるいは卒業生が、実際のムーブメントを起こす企画も立てている。災害公営住宅のコミュニティ維持を課題とし、探究で得た知見を高校生議会で提言した生徒がいるが、大学で地方自治論を学び、地元貢献したいと、進学先を選定した。さらに、売上減少に直面する水産加工会社を立て直すべく経営を学びたいという生徒も大学に進学した。本校での学びをきっかけとし、一度町外の大学へ進学した生徒が研究を深め、また地元に戻って発展に貢献するという継続的なサイクルが、地域にとって大きな力となっている。

「実践性」についての具体的な取組、工夫している点など

山田町は、東日本大震災大津波で壊滅的な被害を受けた。さらに、今後、日本海溝・千島海溝の大震災・大津波への想定もある。つまり、生徒のキャリアを築く、この地の町づくりは、災害と向き合い、防災・減災を両立させた形で進めていかなければならない。震災から10年となり、復興は進んでいるように見える。しかし、町の賑わいは震災前のように戻らず、市街地には空き地が目立つ。その最大の理由は、旧市街地が浸水域であり、住宅等の建設ができずに住民が戻らないことにある。では、どのような町づくりをしていくのか。まず、縦軸（過去から未来への歴史的観点）の視点から、地域の語り部と共にフィールドワークで石碑を探し、先人からの教訓を読み解いた。碑文には、「ここより低地に家を建てるな」などと刻まれ、貴重な史料となっている。また、過去の大津波を経験した高齢者への聞き取り調査も行った。こうした取組を校内へ留めることなく、横軸（地域全体）へ広げ、ホームページへの公開や、岩手日報社と協働しての新聞づくりを実践した。

さらに、山田町復興企画課とのワークショップを行い、災害と向き合いながら発展を目指す町のあり方について意見を出し合ったほか、探究活動をもとに、高校生議会での提言を行った。風化しつつある多数の石碑の教訓を、現代の防災に生かし、マスメディアや町議会の協力を得て情報発信をする取組は、災害に向き合う町づくりに一石を投じている。



＜探究で得た知見をもとに、町へ政策提言をする高校生議会＞

「発展性」についての具体的な取組、工夫している点など

将来のキャリアを形成するには、まず、歴史を学ぶことが重要だと考える。本校の活動では、縦軸と横軸の連携を重要視している。縦軸は歴史的なつながりである。災害を伝承する石碑や、過去の大津波を目の当たりにした高齢者から情報を得て、先人が遺した教訓を、さらに自らが「語り部」として次の世代に引き継ぐ。一方、横軸は、地域へのつながりである。生徒の探究の成果を高校生議会や発表会などの場で、地域あるいは社会全体へ広げる。また、協力機関である岩手日報社には、生徒の探究結果を紹介して頂いたことで、県全体に広げることとなった。

さらに、岩手日報社からは取材の手法を、Google JapanからはICTの活用を、それぞれ伝達して頂いている。さらに、メディアの利用だけでなく、生徒一人ひとりが語り部として、震災の記憶を伝えていくことも、本活動の主眼である。自らの五感で得た知見を語り継いでいくことは、当人にしかできないことである。キャリアを形成していくなかで、地元に残る生徒はもとより、町外へ進学・就職する生徒も、その地で、「語り部」として震災の記憶を伝えていく。災害と共存することが宿命である三陸沿岸地域に生まれ育った生徒から、地域の発展のために、地方自治や企業経営、防災を学ん

で地域に貢献したいという声が多数上がっていることは、キャリア形成の観点でも意義深い。今後も、本校の生徒が探究で得た情報を、地域そして全国に発信する取組を考えていきたい。

学校現場の評価・感想・コメント

【生徒の振り返りシートから】

「山田町のことが好きじゃなかったし、どうでもよかったけど、ふるさと探究と大学の課題が重なって、山田町の活性化について一生懸命考えるようになった。これからも町おこしについて関わっていきたいと思ったし、自分が町おこしに影響を与えられる職業に関わりたいと心から思えるようになった。」

「4月からは地元を離れるので、町を身近に感じる機会が減ってしまうけれど、ふるさと探究の時間を通して感じたり学んだりしたことを、今後社会人になる上で活かしていきたいし、自分自身も山田に貢献できる大人になりたいと思う。」

「碑は大切な家族や友人を守るため、出来事を風化させないためと聞いたので、今度は私たちが語り部となり、風化させないようにしたい。」

関係諸機関（行政・産業・地域団体等）からの評価・感想・コメントなど

山田町は震災で甚大な被害を受けた。しかし、決してあきらめず歯を食いしばり日々復興に向けて尽力する人々の姿がある。これは、幾度も自然災害の脅威にさらされながらもその度に力強く立ち上がる先人の姿から学びを得るといふ歴史の積み重ねがあったからである。山田高校では、地域に着目し、地域を知り、自らの生き方を考えさせることで、高校を巣立った後も社会を創造する一人として力強く歩み続ける生徒の育成に取り組んでいる。生徒の感想には、山田町への関心の高まりに加え、地域のために自分がどのようにあるべきかを考え、主体的に社会とかかわりを持つとする姿が見られる。

また、山田町の歴史や特色だけでなく、課題にも目を向けて自分たちの学びを山田町のこれからは生かそうとする姿がある。高校生議会の活動はその一端であり、参加する高校生の真剣なまなざしから、未来の山田町がさらに活性化していく姿を期待できるのである。

山田町では義務教育学校において、地域の特色を生かした体験学習をはじめ、子供たちを地域で育てる取組を展開している。町では系統性を大切にされた教育としてのキャリア教育にもさらに力を入れていくことを考えている。今後も山田高校と町との連携をさらに密にしながら、県立学校と町立学校の垣根を越えて山田で学ぶ子供たちへの教育の充実を図っていきたい。（山田町）